



文恋靈幽作贗

tontokaimo39

賈作幽靈戀文

久しぶりに「茶房夕子」に立ち寄った。

「あ、お嬢さん、宇野さんいらっしやい！」

お嬢さんと言う言葉に何人かの客が顔を向けた、店内が狭いので聞こえたのだろう。

「流行ってるじゃないか」

「まあまあですよ、今日はお二人でどちらへ？」

「うん、この先の美術館からの帰りだ」

「ああ、あの何とかと言う外国の画家の展示会ですか、宇野さん絵がご趣味で？」

「いや、まあ嫌いじゃあないが、夕子の希望だ」

夕子と言った途端に一人の男性客が立ち上がった、声を上げた。

「夕子！」

夕子は一瞬きよんととして客の顔を見ていたが、

「堅、堅じゃないの！」

と叫ぶとすぐその客の席に駆け寄る、うん？夕子と堅だと…そこまで気安く呼び合える仲とはどう言う関係だ、犬上も少し驚いた顔をしている、夕子と同じぐらいの年齢だが、きちんとスーツを着ているところを見ると学生ではないだろう、夕子はその客の向かい合わせに腰を下ろしたので、私も仕方なく横に座った。

「あ、恭一、これね堅、フフ私は堅の初恋の人」

おいおい、大の男を指して、これ、はないだろう、いや、それほど親しい仲と言うことか…

「何変な顔してるの、私のじゃないわよ、私の方だから安心して、堅は幼馴染よ、中学まで同じ学校だったの」

「よ、よせよ夕子！初恋なんて…で、この方叔父さんですか？」

「この人ね、宇野恭一、フフ私の彼」

「ええっ！」

「不倫じゃないのよ、ちよつとね」

「?…」

私は、この人、か、これ、よりは少しは格上げのようだが、さてどっちが親しさの表れだろう…

「それより堅、堅は関西の大学へ進んだと聞いてたけど？」

「うん大阪だ、就職も本社は向こうの企業だけど東京支店を希望したんだ」

「そうだったの」

「驚いたなあ、この店の名前は夕子だろう、懐かしいなあと思って入ったんだが、まさか本当の夕子に会えるなんて！そうださつきお嬢さんって呼ばれたらどう、夕子この店に関係が？」

「あるようで、無いようで、フッフ、まあいいじゃないの、それより良太は？」

「親父の後を継いでレストランをやってる、美恵が時々よるそうだ」

「あっそうか！」

「で、夕子は？」

「私は花の女子大生、T大のマドンナよ」

「えっ夕子留年！ああ大学院か」

「留年よ、でも成績不良じゃないわよ、ちよつとね」

「その、ちよつと、’’’と言う夕子の癖、まだ直ってないんだなあ」

と言うことから、二人の子どもも時代の思い出話が始まった、ゲンゴロだのウルゴンだのと妙な言葉が飛び交って私が口を挟む余地はなかったが、聞いているのは嫌ではなかった、と言うのも夕子は私に子ども時代の話などほとんどしたことが無いので、それを聞くのは興味深かったからだ、夕子の口の達者なことと何にでも首を突っ込む癖は少女時代からだ

ったようだ。

「そうだ夕子、夕子なら何かわからないか？」

話が途切れたとき、堅と呼ばれた男が口調を改めた、

「何？」

「大学で友人になった岸田亮一と言うのがいるんだ、彼もこつちに就職したので、これからも会えるなど喜んでいたんだが……」

「ええ？」

「彼は今ちよつと参っている」

「あら五月病の季節、もう終わってるけど」

「そうじゃ無いんだ、彼には高校時代からの彼女がいた、確か涼子と言ってたな、大学生になって亮一は大阪、彼女は東京だ、そのため二人はずつと文通で交際を続けていた」

「メールの交換？」

「それが違うんだ、なんと自筆の手紙、私も最初に

聞いたとき笑ったんだが『メールは嫌、自筆だったら会ってるような気分になれるじゃない』と言う彼女の希望だったそうだ」

「純愛物語ね、ひとふでしめらせそうろうか」

「茶化すなよ悲劇なんだ、彼の就職がこつちに決まって、また高校時代のように会えると喜んだ途端に彼女は亡くなった、ほら先にバスと大型トラックの衝突する大きな事故があっただろう、彼女はバスの先頭の席に座っていたらしい、彼女ルームメイトと二人マンションで暮らしていた、事故は職場からの帰りだったそうだ、彼が就職を東京に拘ったのも彼女のことがあったからだと思うんだが…」

「お気のどく…でも私にわかるかもってどう言うこと？」

「それだよ、彼はショックを必死に乗り越えようとしていた、ところがまた彼女から手紙が届いた、立

て続けに三通、大学時代のそれと同じように」

「えっ、それって事故後に？」

「うん、見せてもらったけど日付も消印も彼女の亡くなった後のものだ、大阪の住所から転送されたものだったけどな…だれかのいたずらだろうと言ったんだが、彼は涼子のものに違い無いと言う、内容も筆跡も彼女のものだし、便箋や封筒も彼女がいつも使っていたものだそうだ、そのため彼はノイローゼ気味になっている」

「ふうん、あの世からの恋文か、ねえ恭一どう思う？」

奇妙な話だが、突然振られても答えようが無い。

「別れの言葉のようなものじゃないか、遺言と言うのは大げさだが、悲しいけど先に旅立ちます、貴方はいつまでもお元気で、幸せになつてください、なんてことだろう、それを書いて友人か家族にでも渡

しておく、私が死んで〇日たったなら投函して、と頼んでな、それなら死後に届いても不思議ではない」

「だめよ、貴方の余命は〇月ですと医師に宣告でもされてたらね、だけど彼女は事故死でしょ、どうして前もって別れの言葉が書けるのよ」

「あつ、そうか」

「堅、見せてもらったって、読んだの？」

「うん、他人のラブレターを読むのはどうもと思っただが、かまわないと言うからさ、想像したようなものではなかったよ、日記と言うか随筆と言うか、どこの店のピザは美味しかったとか、アイドルのライブに行ったとか、何々の映画はつまらなかったとか」

「そう、だから四年間も続いたのね、熱々のラブレターを四年間書き続けるなんて無理じゃない」

「内容は熱々ではないが、彼女からは月に四、五通

も届いていたというぜ、亮一は二度に一度程度返事を書いていたそうだ」

「ふうん、一月に四、五通か、けっこう熱々じゃないの、私もそれだけ書きたくなるような素敵の人に巡り合いたい！」

「おい夕子、宇野さんって恋人だろう、変な顔をされてるじゃないか」

「恭一心配することないわよ、もし恭一が地方へ左遷でもされたら、四、五通なんて言わないで毎日メールするから」

「うわっアチツチ！火傷した！」

「フッフ、浮気の監視よ」

と言うようなことで、二日後亮一本人に会った、彼は、生前に彼女から届いた封書と、死後に届いたというその双方を持参していた。これを比較して

見ると確かに同一の筆跡だ。夕子も「間違いないと思うわ」と言っている、ただ死後の三通を丹念に見て「あら」と声を出したが、「どうした？」と聞いても「ちよつと」としか言わなかった、堅によると「ちよつと」と言うのは夕子の子ども時代の口癖だそうだ。

「恭一、明日堅と岸田さんに会うの、同席してね」
「岸田？ あああの亮一と言う男だな、またラブレターが届いたのか？」

「違うの、堅からの頼みだけど、岸田さんね、ほら先日起こったB川殺人事件の容疑者らしいと言うのよ」

「何だと！」

「私もよくわからないの、B川殺人事件調べて来てね」

B川殺人事件と言うのはマスコミが名付けたもので、二日前B川の土手で若い女性が刺殺されていたと言う事件だ、管轄外の事件なので目を通していなかったが概要の報告は一課にも届いている、私はそれを出して読んでみたが、なぜ亮一と言う男に関係があるのかはわからず、結局管轄のW署に訊ねることになった。

「突然警察が来て、山根美智子とはどう言う関係だとしつこく聞くのです、私の知らない名前で答えようがなかったのですが、後で新聞を見たらB川の土手で殺されたという被害者の名前だったので驚きました、どうして私がB川の事件に関係するのか全くわかりません」

「というわけよ、恭一、どうだったの？」

「ああ、被害者は山根美智子二十一歳、職業はOL、

B川の土手で背を登山ナイフのようなもので刺されていた、凶器は見つかっていない、犯行の時刻は二十五日の午後十時ごろ、三日前だな」

「それでどうして亮一に関係があるのですか？」

「それだ、W署はマスコミに発表していないので本当はまだ話せないんだが、被害者が持っていたと思われるバッグの中に封書が一通入っていた、それが亮一君宛てた例の手紙だ」

「ええっ！それで警察が亮一の所に……」

と、堅が驚きの声を上げる、亮一の驚きようも演技とは思えない。

「じゃあ、あの手紙の差出人はその山根美智子と言うことですか？」

「しかし、私はそんな人、全く心当たりが……」

「そうね、違うと思うわ、だとすると……」

夕子が口を開いた、

「おい夕子、何かに気づいたのか？」

「まだよ、でも、もつと後で話そうと思ってたのだけど、差出人の一人はもうわかってるの」

「何？誰なんだ？」

「ルームメートの美枝子ね」

「うん？どうして」

「涼子さん、事故に会う前にもう何通分かの手紙を書いていたのね、マンションの部屋で遺品を片づけた時にそれを持ち出せる人と言ったら誰と誰？遺品を引き取った叔父さんだったら、何のために別々に投函するの、そんな必要無いじゃない、亮一さん宛ての遺品だから一括して届ければ済むことよ」

「そうだな、しかしルームメートがなぜ？」

「亮一さん、美枝子のことを書いた手紙はなかったの？あったとしても美枝子なんてよくある名前だから気づかなかったのでしよう、でも羽追原なんて

姓は珍しいわね、ウオイハラミエコ」

「あっ！」

「そう、亮一さんが涼子さんより前に交際してた人ね、私羽追原さんにもう会ってるのよ、彼女『私の方から身を引いたので、涼子が亮一さんと付き合っても何ともなかったわ、ただ遺品整理を手伝って、ちよつと意地悪がしてみたくなつたの』と言ってたの、涼子さんいつも何通分かを一気に書いて、それを机の引き出しに仕舞ってたそうよ、それを持ち出したんだって、涼子さんと羽追原さんは高校の同級生で親友だったと言うじゃない」

「そうだった：気づかなかった：」

「おい夕子、『差出人の一人は』と言ったな、それはどう言う意味だ？」

「羽追原さんが投函したのは一通だけ、涼子さんの死後に届いた最初のものね、後の二通は別人の仕業、

これは羽追原さんに会う前から気づいてたんだけど」

「うん？そう言えば夕子、何通かを比較して、何か声を出したな、聞いても『ちよつと』としか言わなかったが」

「涼子さんの亡き後に届いた三通、どれも涼子さんが書いたものに間違いは無いと思ったわ、だけど一箇所だけ違ってた」

「うん？そんな所があったか？」

「最後の日付よ、生前の涼子さんから届いたもの、死後に届いた最初のもの、その後の二通、それぞれ数字の筆跡が違ってた、涼子さん投函の直前に日付を書き込んだのね、だから彼女の遺品として残った手紙には日付が入っていない、それに美枝子と、もう一人の誰かは日付を書き込んで投函した」

「なるほど、それならもう一人の誰かと言うのは誰

なんだ？」

「それが問題ね、殺された山根美智子は亮一さんと接点が無いとすると？」

「それならなぜ彼女のバッグの中に？」

「恭一、後で確かめて、山根美智子が持ってたものきつと日付はないはずよ、それより亮一さんに対する警察の見方はどうなの？」

「ああ、手紙を重要な手がかりと見ているのは間違いないが、差出人が美智子でなく涼子なので戸惑っている、亮一君を特に容疑者と見ているわけではないから、まああまり心配することは無いだろう」

「そう、それならいいわ、それにね亮一さん、一通は羽追原さんのいたずら、後の二通、まだだれの作業かはわからないけど同じようなものに違いないわ、不思議でも何でもないことよ」

「そうか、そうですね、少しすつきりしました、あ

りがとうございます、堅に聞いていたのですが、夕子さん凄いですね」

「夕子は昔からそうなんだ、それより宇野さん、どうしてマスコミに発表していないような警察の内部情報を？…」

「あら紹介しなかったかしら、恭一ね、警視庁捜査一課の警部よ」

「ええっ！人は見かけ…あああ…い、いや！」

「フフフ、それって恭一にぴったり」

まったくよく言ってくれるぜ、うん？待てよ…どこかで聞いたセリフじゃないか…

「おい！俺に何の用だ！」

「宮原武さんね、呼び出してごめんなさい、私永井夕子、岸田亮一さんの友人なの」

「それがどうした」

「貴方も亮一さんをよく知ってるわね、高校の同級生でしょう」

「だから何だと言うんだ、さっさと用事を言えよ」

「じゃあずばりいうわ、亮一さんにおかしな手紙を送ったのは貴方でしょう」

「知るか！第一俺は涼子なんて知らないぜ」

「あら！私いつ涼子と言った？」

「あつ、チエツ！そうだ俺だ、俺だよ、だが俺だけじゃ無いぜ、ルームメイトだとかいう女、他人の引き出しから封筒のようなものを出してそつと隠したんだ、何だろうと思つて俺も覗いたら亮一宛の手紙じゃあないか、ふうん亮一のやつここの女と付き合つてたのか、しかし彼女他人の手紙なんかどうするつもりだと考えてさ、そうか、よし俺も脅かしてやれと思つたんだ」

「そう、何通あつたの？」

「三通だ、一通でよかったんだが人が来たので慌てて全部掴んで、おい待て、おまえどうして俺のことを知ってる？」

「貴方運送店のアルバイトで涼子のマンションに行っただけでしょう、あの部屋からこっそり何かを持ち出せるのは涼子の遺品整理をした人ね、涼子の叔父さんとルームメートの美枝子だけど、叔父さんは関係ないでしょう、美枝子、いたずらしたのは一通だけと言ってるの、それなのに亮一に届いた手紙は三通よ、だとすると二人の他にも誰かがいたはずね、そうだ、引越越し屋さんだと気づいたのよ、そこで調べたら貴方だったってわけ」

「チェツよけいなことを、まあいい、亮一によるし、くと言っておいてくれ、あいつ高校のときから大嫌いだったんだ、じゃあ帰るぜ」

「待って、貴方、封書の他にも持ち出したものがあ

るでしょ」

「何だと！」

「涼子の預金通帳とキャッシュカード」

「バカな！どうして俺が！」

「涼子いくら待ってたの？百万の単位より上でしよう」

「知るか！俺が持ち出した証拠でもあるのか！」

「あら違うの、じゃあごめんなさい、そうだ、この頃の銀行って預金者が死亡するとすぐ支払いを停止するのね」

「何だと？」

「遺族の遺産争いに巻き込まれるのを防ぐためよ、遺産配分が確定した旨の証明書を出さない限り誰にも支払わないの」

「……」

「私、明日にでも涼子は亡くなったって通報しなく

ちや、どこの銀行かは美枝子さんから聞いてるから、二人は同じ銀行を使ってたんだって」

「おい、おまえ：」

「銀行はすぐ区役所で確認するわね、そうして直ちに支払いは凍結、そうなるとカードや通帳を持ってても、もう宝の持ち腐れよ、あつ貴方急いであるのでしよ、私もこれで失礼するわ」

「お、おい！ちよ、ちよつと待て！」

「あら、何？」

「おまえ、何が望みだ！」

「涼子、いくら持ってたの？」

「三千万だ」

「そう、じゃあ五割、いや六割ね」

「何だと！どうしておまえが六割になる！」

「私ね、暗証番号知ってるの、これ知らないかどうかにもならないでしよ」

「く、くそ！」

「カードか通帳、どっちかを私に渡して、そうしたら番号教えるわ、どこにあるの？」

「俺のアパートだ」

「あらここの近くね、持って来てくれる」

「ああ、い、いや一緒に行こうすぐそこだ」

「そう、いいわ、男性の部屋を見るって面白いかも」

「どうして後ろを歩くの？貴方、私を部屋まで案内してくれるのですよ？」

「あ、ああ」

「あら、こっちだったかしら、道が違うんじゃない？」

「近道だ」

「ここ川土手ね、ずいぶん寂しいところじゃないの」

「そうさ、その方がいい」

「どう言うこと？」

「おまえ新聞読んでないのか、ここはB川の土手だぜ」

「ああそうか、そう言うこと、いいの？暗証番号がわからなくなるわよ」

「ふん、どうせ嘘だろう、どうして亮一が番号を知ってる？もし知ってたとしても、自分の彼女の預金番号を他人のおまえに教えるわけがない」

「ばれたか、じゃあ五割でいいわ」

「バカヤロウ！美智子がどうなったか知らないのか！」

「美智子さんって、貴方の彼女じゃなかったの？」

「そうさ、だがどうせ別れるつもりだったんだ、あいつ俺の部屋で通帳を見つけておまえと同じことを言った」

「だから？」

「だから刺したんだ！今ここに持っているナイフでな、今度はおまえだ」

「そう、それでここへ連れてきたのね、でもちよつと待って、美智子さんバッグ持ってなかった？」

「持ってたさ、中に例の手紙を入れていた、俺が涼子の部屋から何かを持ち出した証拠として脅すつもりだったんだな」

「じゃあなぜ抜き取らなかったの？」

「亮一宛じゃないか、ちようどいい、警察がまず疑うのは亮一だと思ったのさ」

「ふうんそうか、それはそうね」

「何感心してる、おまえ、怖くないのか！」

男はポケットからナイフを取り出した、

「よしそこまでだ！」

声と同時に、男の手は振り上げられた。

「恭一、何怒ってるの？」

「俺は犯人を誘い出すような危ないことをすると聞いてなかったぜ『二人で話をするから隠れて聞いてて』と言っただけじゃないか」

「あの話し合いね、通帳を盗み出したことは認めさせたわ、でも美智子殺しまでは無理でしょう、ああするより仕方がなかったの」

「近寄り過ぎると気づかれる、離れていて突然跳びかかられたら間に合わない、ずいぶんハラハラしたぜ」

「でもうまくいったじゃない、それにこの事件の解決は、恭一が運送屋と涼子の身の回りを調べてくれたおかげね、危ないかもわからないけど、恭一だったら心配はないと思ってたわ、私貴方を全面的に信頼してたの」

「うまいこと言っでごまかすな、万一と言うことも

あるだろう」

「そうね、ごめん」

「ふん、ところでマンションからの引き上げだったのだから、運送屋がいたことは考えて見ればわかることだ、しかし涼子を調べろと言ったのはどう言うわけだ？」

「マンションを見て、すぐおかしいと思ったの、いくら二人だから半額と言っても、あのマンション普通のOLが払える金額のところではないわ」

「そうか、一方では恋人にせつせと手紙を書いていた純愛物語のヒロイン、ところが裏では金持ちの中年男数人を相手にして、うまいこと言っては金を貢がせていたんだからな…やはり女性は怖い」

「あら、私も女性よ」

「夕子はもつと怖い、平気で危険なことをするじゃないか」

「もう、まだ怒ってるの、そんなに怒らないでよ、あそうか、怒るってことはそれだけ私を心配してくれてるってことよね、ありがとう恭一！」

「こ、こら！そのとび付くのはやめろ」

「フフフ、いいじゃない、今更赤くならなくても」

「バカ！ところで亮一にはどうする？涼子たち二人の裏のことだ」

「黙ってる方がいいわね、堅にも」

「そうだな、それがいい」

「でもずいぶん儲かるのね、私も始めようかしら
…」

「何だと！お、おい！」

「バカ！冗談に決まってるでしょ、恭一も中年だけど、どう操ってもお金なんて出ないじゃない」

鷹作幽霊恋文

<http://p.booklog.jp/book/99872>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99872>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99872>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ